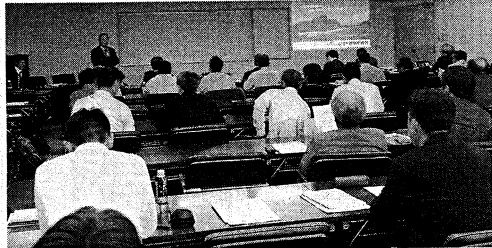


杉CLT床の2時間耐火性能を確認

実現可能な床システム開発へ

超高層ビルに木材を使用する研究会



林野庁委託事業の中間報告会では、山佐木材、大分大学、福岡大学、建材試験センターなどから各種実験結果などが説明された

超高層ビルに木材を使用する研究会（稲田達夫会長）は10月31日、福岡大学で総会と記念講演会、林野庁委託事業中間報告会を開いた。同研究会は杉CLTを中心に非木造ビルに木材を使用するための様々な課題を解決すべく研究に取り組んでおり、設立から3年を迎えて法人会員12社、個人会員49人になっている。総会では役員改選が行われ、稲田会長（福岡大学工学部建築学科教授）ほか役員全員が再任された。

林野庁委託事業は2013年度から連続して採択を受けており、事業責任者は山佐木材、諮問組織を同研究会が担う形で、超高層鋼構造オフィスに床にCLT等を使用するために必要な検討、実験（接合部データの収集・分析、耐火部材開発）などを行っている。また成果普及のため福岡、東京で報告

会を行った。中間報告では、これまでに鉄骨フレーム+杉CLT床利用は強度上設計可能なレベルとし、2時間耐火性能も珪酸カルシウム板15^ミ+強化石膏ボード45（15×3枚）^ミ、ALC板（ユカテック）36^ミ+強化石膏ボード30（15×2枚）^ミでクリアできることを確認できた。

火部材開発）に採択され、建築研究所、国土技術政策総合研究所、森林総研、建材試験センター、大分大学、福岡大学などと連携し、コスト削減を目的とした新たな2時間耐火床システムの開発などに向け、耐火被覆や接合強度などの把握、検討を進める。

記念講演会では「鋼木質複合構造（CSTS）の研究」（岩田衛生、奈川大学工学部教授）、「ロンドンオリンピックから東京オリンピックへ」（彦根茂Arup Japan顧問）の2題を聴講した。

岩田氏は、地震の多い我が国では構造に信頼感のある鉄骨造を中

心に考えているが、そこに木材を大量に使用することは重要だと指摘した。床だけでなく、柱は角型鋼管+杉集成材、梁には圧延H型鋼+杉集成材などを使用し、接合は勘合十方杖とする事例を示し、その利点、設計法など現在までの検討内容を紹介した。

彦根氏はArup（英国）が関係したロンドンオリンピックの木利用施設、また日本での木構造実績（大分県立美術館、ROKI、みんなの森きふメディアコスモス、狭山湖畔霊園など）について説明し、東京オリンピックでの木材活用にも期待を示した。

山佐木材株式会社
CLT 金型
（別冊掲載）